

シャーロキアン

Sherlockian



イギリスではホームジアンHolmesianと呼ばれる。ドイルが創造した名探偵シャーロック・ホームズを熱烈に崇拝し、研究する人々をいう。また、架空の存在であるホームズを実在の人物と見なして伝記なども出されている。



モリアーティ

Moriarty



イギリスの大悪人、犯罪組織の首領。ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズに登場。名門の生まれで大学教授。数学の天才。21歳で二項定理についての論文を書き、全ヨーロッパの評判になった。しかしその悪魔的な遺伝性格により、ロンドンの暗黒街を牛耳り大犯罪を裏で操っていた。ホームズはそれを見抜き、犯罪社会のナポレオンだとしている。モリアーティもホームズを天敵と考え、ライヘンバッハの滝でホームズと組み合って滝壺に落ち、最期を遂げた。

密室

Locked room/
sealed room



世界最初の推理小説であるポーの短編『モルグ街の殺人事件』（1841発表）のように、内部からしか施錠できないはずの室内に被害者のみがいる状況を典型とする。広義には目撃者による結界、また雪面や砂浜などに犯人の足跡が見出されない状況も含まれ、後者は特に「雪の密室」などと呼ばれるが、不可能犯罪の大部分が広義の密室に属すると言えよう。古典とされるザングウィル『ビッグ・ボウの殺人』（92）、ルルー『黄色い部屋の謎』（1908）を経て、J・D・カーは作品の大半で密室ないし不可能犯罪を扱っている。

安楽椅子探偵

Armchair detective



必ずしも安楽椅子に座っているわけではないが、犯罪現場に出かけずに、他の人から犯罪情報を聞いて事件を推理し、解決する名探偵のこと。その第1号はシールが作り出したプリンス・ザレスキーで、短編集『プリンス・ザレスキー』（1895）に初めて姿を現す。しかし、もっとも有名なのはバロネス・オルツィの短編『フェンチャーチ街の謎』（1901発表）に初登場する「隅の老人」だろう。この老人は喫茶店で女性記者のポリー・バートンを相手に、新聞記事や検死審問の記録をもとに見事に難事件を解決してみせる。クリスティのミス・マーブル、スタウトのネロ・ウルフなどもこの系列に属するといえる。

レッド・ヘリング

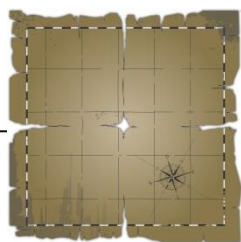
Red herring



直訳すれば赤い鯀だが、燻製して赤くなった鯀を、イギリスでキツネ狩り反対派が獵犬の鼻を惑わすために用いたり、愛好派が訓練に用いたことから、相手の注意をそらせるもの、またその行為を指すようになった。奇術用語でいう、左手で仕掛けをする際に右手で観客の注意を集めるといったような「ミスディレクション misdirection」（誤導）と同義。ミステリーでは真犯人以外の怪しげな人物の意に用いられることも多い。この技巧はクリスティが得意とし「ミスディレクションの女王」と称された。

ダイイング・メッセージ

Dying message



トリックの一種で、瀕死の重傷を負った被害者などが死ぬ間際に残す、犯人や事件を暗示する謎めいた手がかりのこと。言葉や身振り手振り、また何らかの行動のこともある。いずれにしても死ぬ間際に残すものなので、不完全な内容であり、それだけでは理解できない一種の暗号ともいえるべき謎になる。本格派の巨匠クイーンは、『Xの悲劇』（1932）『シャム双生児の秘密』（33）などで使用している。

本格の作法



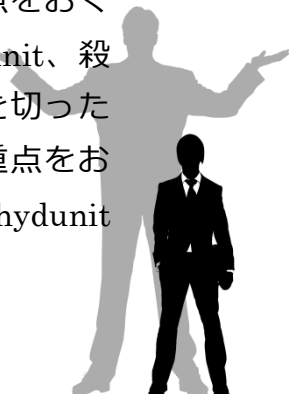
高位の聖職者にして、エッセイスト、探偵小説作家でもあったロナルド・ノックスは、探偵小説は「かたや作者、かたや読者のあいだで戦われる知的ゲームである」と言っている。1920年代後半に入ると、このような探偵小説の作者が厳守すべきルールを規定しようとする動きが現れ、読者に対してフェアに戦うことが重要と考えられた。ノックスの『探偵小説十戒』やヴァン・ダイン『探偵小説作法二十則』（28）において、作者が守るべきルールがまとめられた。ヴァン・ダインは、論理的な謎解き以外の恋愛要素などをすべて排除すべきという極端な本格派の立場を鮮明に打ち出した。

フーダニット

Whodunit



Who done it?（誰がやったのか）を短縮したアメリカの俗語で、犯人探しの趣向に重点をおいた作風に用いられる。不可能犯罪など犯行トリックの解明に重点をおくものをハウダニットhowdunit、殺人動機や、なぜ死体の首を切ったかといった理由の解明に重点をおくものをホワイダニットwhydunitと呼ぶ。



スパイ小説

Spy novel



スパイを主題とする小説で、プロ・スパイの暗闘を描くものから、平凡な市民が国際スパイ戦に巻き込まれる恐怖を描くもの、活劇スパイの冒険ものなど、多彩な流れがある。ソ連・東欧圏の崩壊後は仮想敵国がなくなり、スパイ小説も難しい地点に立たされている。



警察小説

Police procedural



警察の実際の集団捜査についてさまざまな情報を取り入れた形で再現したミステリーで、常に特定の個人の警察官が名探偵として活躍するのではなく、警察組織の中でさまざまな捜査員が事件ごとに主役として活躍するものである。トリートの『被害者のV』（1945）が最初の試みといわれるが、この形式を完成したのは『警察嫌い』（56）から始まったマクベインの「87分署」シリーズである。特に初期の作品には、警察関係の書式なども作中に織り込まれ、現実感が豊かである。

ハードボイルド

Hard-boiled



1920年に創刊されたアメリカの「ブラック・マスク」誌を母胎とし、ハメットによって確立された。従来の思索型の探偵に対し、行動派探偵小説と当初は和訳されていた。本来は「固ゆで卵」の意だが、「非情な」という意味で用いられ、多くは私立探偵を職業とするタフな主人公が活躍する。ハメット、チャンドラー、R・マクドナルドを評論家バウチャーは正統ハードボイルドと称えた。



サスペンス小説

Suspense novel



主人公の不安、緊張など緊迫した心理を描くもので、論理的な謎解きよりも主人公の恐怖感に主点が置かれるため、心理小説的な色彩が強い。典型的なものは、サスペンスを高めるためタイムリミットを設けるものがある。アイリッシュは、『幻の女』（1942）で、死刑を執行される直前までに妻殺しの濡れ衣を着せられた夫を救出するために必死に努力する人々を描き、『暁の死線』（44）では、夜明けまでの5時間の間に真犯人を突き止めなければならない男女を描いている。

警察小説

Police procedural



苟々

警察の実際の集団捜査をさまざまな情報を取り入れた形で再現したミステリーで、常に特定の個人の警察官が名探偵として活躍するのではなく、警察組織の中でさまざまな捜査員が事件ごとに主役として活躍するものである。トリートの『被害者のV』（1945）が最初の試みといわれるが、この形式を完成したのは『警察嫌い』（56）から始まったマクベインの「87分署」シリーズである。特に初期の作品には、警察関係の書式なども作中に織り込まれ、現実感が豊かである。



密室

Locked room/
sealed room



世界最初の推理小説であるポーの短編『モルグ街の殺人事件』（1841発表）のように、内部からしか施錠できないはずの室内に被害者のみがいる状況を典型とする。広義には目撃者による結界、また雪面や砂浜などに犯人の足跡が見出されない状況も含まれ、後者は特に「雪の密室」などと呼ばれるが、不可能犯罪の大部分が講義の密室に属すると言える。古典とされるザングウィル『ビッグ・ボウの殺人』（92）、ルルー『黄色い部屋の謎』（1908）を経て、J・D・カーは作品の大半で密室ないし不可能犯罪を扱っている。

ダイイング・メッセージ

Dying message

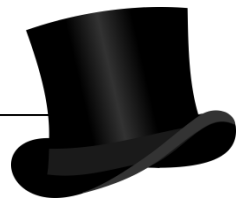


トリックの一種で、瀕死の重傷を負った被害者などが死ぬ間際に残す、犯人や事件を暗示する謎めいた手がかりのこと。言葉のこともあるし、身振り手振りのこともあり、また何らかの行動のこともある。いずれにしても死ぬ間際に残すものなので、不完全な内容である、それだけでは理解できない一種の暗号ともいべき謎になる。本格派の巨・クイーンは、『Xの悲劇』（1932）『シャム双生児の秘密』（33）などで使っている。



サプライズ・エンディング

Surprise ending



意外な結末。ミステリーの魅力は、出発点における不可思議性、中道におけるサスペンス、そして結末の意外性にあるといわれるが、最後にあっと驚くような結末が用意されていれば、印象は強烈である。意外な結末と言う場合、意外な犯人、最も犯人らしくない人物が犯人であるという場合と、トリックや動機、犯罪発覚の手がかりその他が奇抜で意外である場合の2つのケースが考えられる。意外な犯人という例ではクイーンの『Yの悲劇』（1932）やクリスティの『オリエント急行殺人事件』（34）などがある。こういう意外な犯人の場合はしばしば、どんでん返しなどによって、意外性が強調される。また、後者の例は、R・ダールの短編『おとなしい兇器』（『あなたに似た人』（53）収録）などがある。

日本の例では、江戸川乱歩の『陰獣』（1928発表）や小泉喜美子の『弁護側の証人』（63）など。サプライズ・エンディングを得意とする作家に、泡坂妻夫、連城三紀彦、綾辻行人、折原一らがいる。

倒叙

Inverted detective story



普通のミステリは、まず事件が起こり、警察あるいは探偵役が捜査に乗り出し、犯人の行動や動機を推理して事件を解決する。しかし、倒叙もののミステリでは、まず、前半で犯人が完全犯罪を計画する形であらかじめ手の内を明らかにする。その後、計画を実行し、それが成功したかに見えた時点で、今度は逆に警察や探偵の側が捜査を開始し、犯行を暴き、事件を解決する。つまり、ストーリーの展開の仕方が普通のミステリとまったく逆なので、倒叙というわけである。この形式は1912年にフリーマンが短編集『歌う白骨』で初めて試みた後、アイルズ『殺意』(31)、クロフツ『クロイドン発12時30分』(34)など多くの名作が生まれた。日本にも、多岐川恭『静かな教授』(60) 松本清張『黒い福音』(61) 土屋隆夫『不安な産声』(89) などがある。結末の意外性には乏しいが、最初に犯人の動機をじっくりと書き込めるので、個性的な人間を描くのに適している。テレビドラマの「刑事コロンボ」「古畑任三郎」もこの手法である。

『新青年』



総合雑誌。1920年1月号から50年7月号まで400余冊。初代編集長に森下雨村。海外の探偵小説を載せたところ、支持を得られたため、次第に探偵小説中心とした誌面になっていく。探偵小説の募集も行い、21年には横溝正史が、23年には江戸川乱歩が登場。36年頃から戦時色が強くなり、戦時中は時局読み物を載せることで存続していた。戦後は現代小説中心にしたため、推理小説雑誌創刊ラッシュに乗り遅れ、戦前の勢いを取り戻すことはなかった。

フェアプレイ



解決に必要な手がかりを作者がすべて開陳し、また地の文に嘘を書かないといった創作態度。英米の黄金時代ころより本格ものに望ましい態度とされ、1928年、ヴァン・ダインの「推理小説作法の二十則」によって明文化された。クイーンは初期作品中に読者への挑戦状を挿入してフェアプレイを宣言し、この手法は30年代アメリカで流行を見たほか、横溝正史『蝶々殺人事件』（48）をはじめ、犯人当て小説である坂口安吾『不連続殺人事件』（48）、初期の高木彬光に多く見られ、現代の新本格派の一部にまで及んでいる。読者に挑戦しないまでも、フェアプレイは現代ミステリでは常識であり、そうでない場合アンフェアと非難される。

プロバビリティ
の犯罪

階段にビー玉を放置して相手が転落死するのを待つといった、確実性に乏しくとも疑われる危険も少ない犯罪を江戸川乱歩がこう名付けた。乱歩は谷崎潤一郎の『途上』（1920発表）にこれを見出し感銘を受け、自らも『赤い部屋』（25発表）を書いた。しかし犯罪として立件しにくいだけに作例は少ない。他にクリスティ『もの言えぬ証人』（37）、フィルポッツ『極悪人の肖像』（38）、松本清張『なぜ「星図」が開いていたか』（56発表）など。

本格



推理小説のうち、謎解き、トリック、頭脳派名探偵の活躍などを主眼とするもので、1841年、ポーの『モルグ街の殺人事件』によって原型が確立された。ドイル、チェスタトンらの短編時代を経て、1920年代、クリスティ、クイーン、カーらが長編本格の黄金時代を築くと、フェアプレイ、サプライズ・エンディングなどの付帯条件が整備された。

本格とは日本独自の表現で、変革探偵小説との弁別のため、25年ごろ甲賀三郎によって命名されたようである。江戸川乱歩の初期短編や大阪圭吉、長編では浜尾四郎、蒼井雄らによって試みられ、戦後になって、横溝正史、高木彬光、鮎川哲也、土屋隆夫、仁木悦子らが活躍した。その後、リアリティに反するといった批判を受け、一時的に退潮を余儀なくされたが、80年代後半からは新本格派などの作家によって新たな活況を呈している。

警察小説

Police procedural



苟々

警察の実際の集団捜査をさまざまな情報を取り入れた形で再現したミステリーで、常に特定の個人の警察官が名探偵として活躍するのではなく、警察組織の中でさまざまな捜査員が事件ごとに主役として活躍するものである。トリートの『被害者のV』（1945）が最初の試みといわれるが、この形式を完成したのは『警察嫌い』（56）から始まったマクベインの「87分署」シリーズである。特に初期の作品には、警察関係の書式なども作中に織り込まれ、現実感が豊かである。



密室

Locked room/
sealed room



世界最初の推理小説であるポーの短編『モルグ街の殺人事件』（1841発表）のように、内部からしか施錠できないはずの室内に被害者のみがいる状況を典型とする。広義には目撃者による結界、また雪面や砂浜などに犯人の足跡が見出されない状況も含まれ、後者は特に「雪の密室」などと呼ばれるが、不可能犯罪の大部分が講義の密室に属すると言えよう。古典とされるザングウィル『ビッグ・ボウの殺人』（92）、ルルー『黄色い部屋の謎』（1908）を経て、J・D・カーは作品の大半で密室ないし不可能犯罪を扱っている。

ダイイング・メッセージ

Dying message

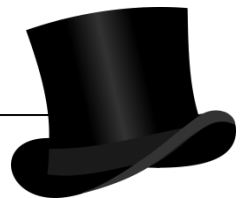


トリックの一種で、瀕死の重傷を負った被害者などが死ぬ間際に残す、犯人や事件を暗示する謎めいた手がかりのこと。言葉のこともあるし、身振り手振りのこともあり、また何らかの行動のこともある。いずれにしても死ぬ間際に残すものなので、不完全な内容である、それだけでは理解できない一種の暗号ともいべき謎になる。本格派の巨・クイーンは、『Xの悲劇』（1932）『シャム双生児の秘密』（33）などで使っている。



サプライズ・エンディング

Surprise ending



意外な結末。ミステリーの魅力は、出発点における不可思議性、中道におけるサスペンス、そして結末の意外性にあるといわれるが、最後にあっと驚くような結末が用意されていれば、印象は強烈である。意外な結末と言う場合、意外な犯人、最も犯人らしくない人物が犯人であるという場合と、トリックや動機、犯罪発覚の手がかりその他が奇抜で意外である場合の2つのケースが考えられる。意外な犯人という例ではクイーンの『Yの悲劇』（1932）やクリスティの『オリエント急行殺人事件』（34）などがある。こういう意外な犯人の場合はしばしば、どんでん返しなどによって、意外性が強調される。また、後者の例は、R・ダールの短編『おとなしい兇器』（『あなたに似た人』（53）収録）などがある。

日本の例では、江戸川乱歩の『陰獣』（1928発表）や小泉喜美子の『弁護側の証人』（63）など。サプライズ・エンディングを得意とする作家に、泡坂妻夫、連城三紀彦、綾辻行人、折原一らがいる。

サプライズ・エンディング

Surprise ending



意外な結末。ミステリの魅力は、出発点における不可思議性、中道におけるサスペンス、そして結末の意外性にあるといわれるが、最後にあっと驚くような結末が用意されていれば、印象は強烈である。意外な結末と言う場合、意外な犯人、最も犯人らしくない人物が犯人であるという場合と、トリックや動機、犯罪発覚の手がかりその他が奇抜で意外である場合の2つのケースが考えられる。意外な犯人という例ではクイーンの『Yの悲劇』（1932）やクリスティの『オリент急行殺人事件』（34）などがある。こういう意外な犯人の場合はしばしば、どんでん返しなどによって、意外性が強調される。また、後者の例は、R・ダールの短編『おとなしい兇器』（『あなたに似た人』（53）収録）などがある。

日本の例では、江戸川乱歩の『陰獣』（28発表）や小泉喜美子の『弁護側の証人』（62）など。サプライズ・エンディングを得意とする作家に、泡坂妻夫、連城三紀彦、綾辻行人、折原一らがいる。

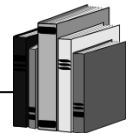
クローズド・サークル

Closed circle



嵐の山荘や絶海の孤島など、さまざまな自然条件のために外界と遮断された場所に複数の人物が閉じ込められ、その閉鎖空間で連続殺人事件が起こるという設定を指す。犯人を含む容疑者と探偵は、この閉鎖空間の内部に属する。クイーン『シャム双子の謎』（1933）クリスティ『そして誰もいなくなった』（39）綾辻行人『霧越邸殺人事件』（90）などが代表作として挙げられる。

叙述トリック



ミステリの書き方、叙述の仕方、あるいは構成を利用したトリック。クリスティは1926年の『アクロイド殺人事件』で、物語の語り方に工夫を凝らし、結末の意外性で読者をあっといわせた。しかし同時に、このトリックはアンフェアであるという議論も起こり、世界的に大きな反響を巻き起こした。

日本でも、必ずしもトリックとまではいえないにしても、語り口に斬新な工夫をしたものに都筑道夫の『やぶにらみの時計』（61）、『誘拐作戦』（62）があり、トリックとして取り入れたものに小泉喜美子の『弁護側の証人』（62）、斎藤栄の『紅の幻影』（69）などがある。このほか叙述トリックを得意とする作家に中町信、折原一らがいる。